帝都物語 8

未来宮篇

荒俣宏

KADOKAWA NOVELS

霊的改造から防衛へ――。
帝都守護を叫び、不屈の魂が蘇える。
書下しサイキック伝奇ノベル第8弾!

カドカワ ノベルズ

昭和六十二年二月二十五日初版発行

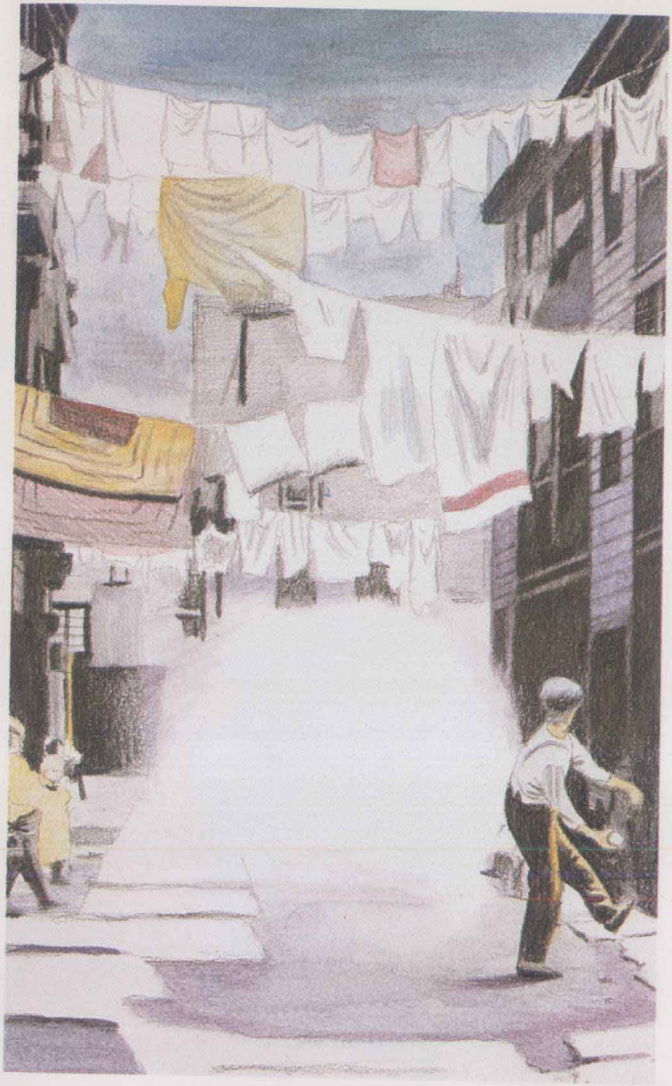
著　者　荒俣宏（あらまたひろし）
発行者　角川春樹

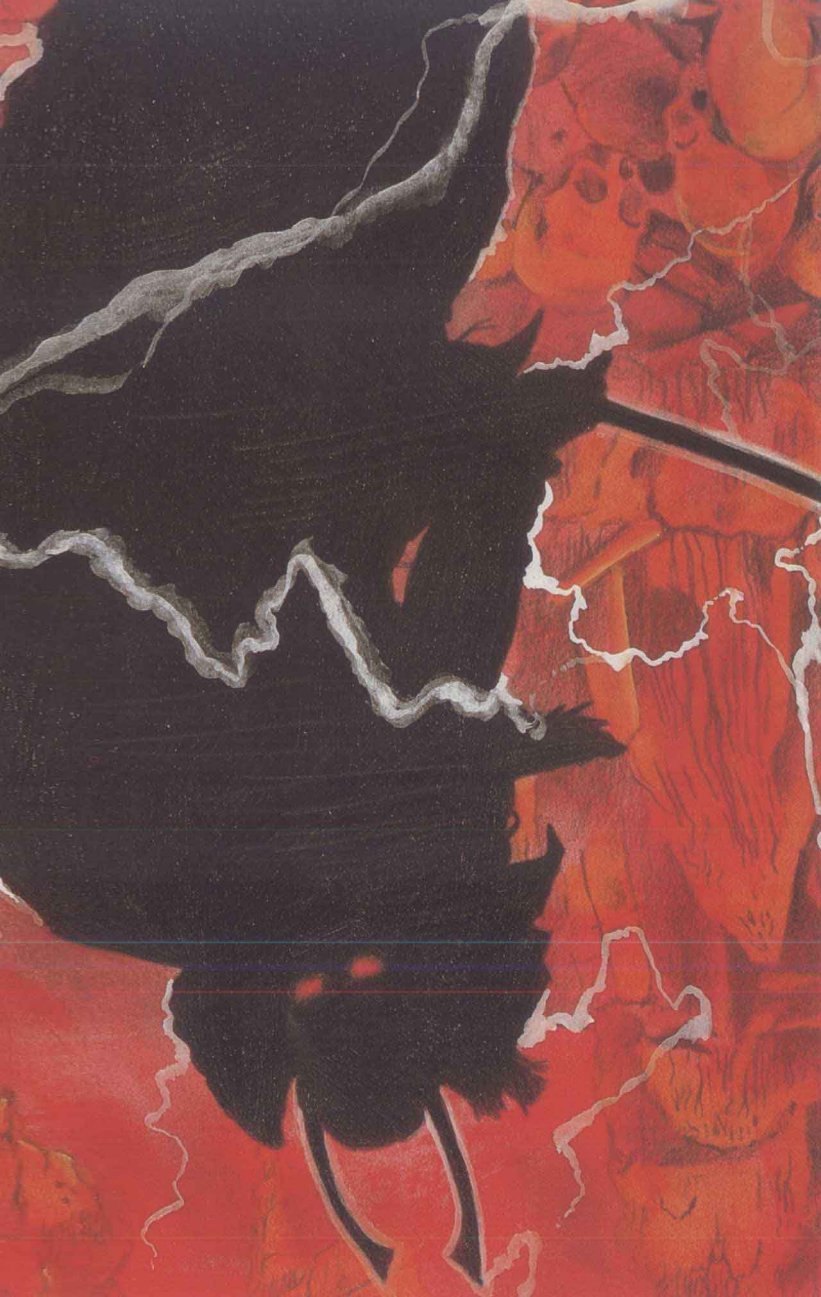
帝都物語（ていとものがたり）　8　未来宮篇（みらいきゅうへん）

印刷所　暁印刷株式会社
製本所　本間製本株式会社
装丁者　岡村元夫

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二-一三
〒一〇二　電話　営業〇三-二三八-八五二一　編集〇三-二三八-八四五一　振替東京三-一九五二〇八

Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN 4-04-777808-7　C0293





此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

KADOKAWA NOVELS

帝都物語8

未来宮篇

荒俣 宏

絵・口絵・本文イラスト／丸尾末広

目次

序　未来に訪れた夜　13
巻一　東京の開放　28
巻二　運命は動きだした　51
巻三　腐りゆく魔都　98
巻四　妖女たちの東京　179
巻五　転生の記憶　227

前巻までのあらすじ

戦後の東京は市街戦の中で発展を続けた。既成の左翼運動からはみ出した若者たちの怒りや夢が大きなうねりを生みだし、東京を破壊する〈内部の敵〉となりつつあった。こうした情況は、すでに老齢の身となった目方恵子や、生きる希望を失った辰宮雪子の生活を押しつぶした。辰宮洋一郎の旧友鳴滝純一も坊津に引きこもったまま、ついに行方知れずとなる。

新左翼の破壊活動が頂点をめざしだした昭和四十年代、ただひとり屍解という仙術を用いて若返った加藤保憲は自衛隊幹部に名を連ね、ひそかに作家三島由紀夫の祖国防衛隊を支援していた。加藤の目的は、左翼学生と自衛隊との武力対決を通じて東京を混乱の坩堝に叩きこむことであった。折から、地霊や妖怪、また江戸の怨霊を封じこめていた要石や封印が次々に破られ、地上に魔物が跳梁しはじめていた。このうえ江戸最大の怨霊平将門が目を醒ませば、明治政府が築いた現在の東京は魔の手により一掃される。目方恵子は、将門の首を祀った大手町首塚の地下を掘りぬいた角川源義に呼ばれ、墓の秘密を目撃する。そこには巨大な桜の根が埋もれており、怨霊の屍骸を必死で封じこめていたのだ。

しかしその東京へ、新左翼に味方する邪視の持ち主ドルジェフが姿をあらわす。この怪人の活動により新左翼は一時東京を制圧するが、意を決した目方恵子は自らの乳房を掻っ切り、鬼女となって邪視の魔人に挑戦する。生命を賭けた彼女の魔術は効を奏し、ついに難敵をうち倒すのだが、平将門の娘辰宮雪子は邪視に見据えられて絶命する。

そしてその夜、雪子をはじめとしておびただしく流された血が雨とともに地下へ滲みこみ、奥津城に眠る将門の亡骸にしたたり落ちた。雪子の血に触れた将門は、暗い怒りに駆られて永遠の眠りから醒める……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

〈主な登場人物〉

平将門　平安期関東最大の英雄、中央政権に刃向かい、関東を独立国家化したため討伐されたが、その一生は関東ユートピア設立のためにささげられた。すでに千年間、東京の中心を鎮護しつづけている大地霊。

加藤保憲　帝都完全崩壊をもくろむ怪人。〝将門の霊〟との闘いに敗れ、いったんは満州へ去ったが中国の秘術により不老不死となり、再び東京へ舞い戻り自衛隊員となる。再度、帝都を崩壊すべく東京湾の海底に眠る地竜を目覚めさせようとする。

三島由紀夫　小説家。昭和四十五年十一月二十五日市ヶ谷の自衛隊駐屯地で自決。自決後、その霊は地下に下り地霊と対決する。その後、大沢美千代として転生する。

大沢美千代　長野県の山村から目方恵子によって東京に呼び寄せられる。三島由紀夫の転生として昭和四十五年十一月二十五日の午後三時に、この世に生をうける。東京では托銀事務センターに務めるかたわら、目方恵子の下、いよいよの時には魔人加藤保憲と対決すべく、また目方恵子の後継者として神女になる修業をする。

目方恵子　東北にある俤神社の宮司の娘。東京の大地霊、平将門に仕える神女として魔人加藤を倒すため、数々の闘いに挑んできた。年老いた自分の後継者として大沢美千代を選び神女の修業を積ませる。

団宗治　托銀事務センター電算室の次長。片手間に世紀末風オカルト小説を書く。幸田露伴と三島由紀夫を心の師と仰ぎ魔術と文学に深い興味を持つ。目方恵子とは二十年来の知り合いである。コンピューターを使った前生回帰実験を行って大沢美千代に前生の記憶を取り戻させようとする。目方恵子の協

力者である。

五島政人　托銀事務センター電算室課長。

中川菊代　托銀事務センター電算室主任。

岡田英明　電通東京本社に勤務。SF作家、ロックミュージックの評論家でもある。団宗治の旧友。

藤盛照信　路上の建築史家（東京に残された役に立たないもの、不思議なもの、怪建築、古建築のたぐいを調査し地図化する）。鳴滝純一の依頼で東京湾から、大震災で崩壊した銀座の赤煉瓦の引き上げ作業をする。団宗治の友人。

鳴滝純一　理学士。九州で巨富を築き、戦後東京にもどる。百歳を越える老齢であるが、全財産を投じて自宅の地下室に震災前の銀座煉瓦街を復元しようとする。

鳴滝二美子　鳴滝純一の養女。

角川春樹　昭和六十六年一月、角川書店社長を突然辞任し、出家する。その後、消息不明であったが、破滅教の裏に見え隠れする。

序　未来に訪れた夜

海底火山の噴出を思わせる暗い赤色の焔があがった。
油だらけの海面が、一瞬、虹色の輝きを放って揺れた。
暗い赤色の焔はすぐにオレンジ色に変わり、灯影を安定させた。まるでオレンジ色のフィルターでもかけたように、晴海埠頭から見る東京湾は赤茶けた異様な眺めになった。
重い赤色に包まれた風景の中で、埠頭にたたずむ二人の女だけが濃い葡萄色に映えた。二人とも、おそらくライト・ブルーの衣服をまとっているのだろう。やや背の高い方は洋服だが、もう一方の服装は和服だった。そんなものを身に着けているのは、よほどの老齢に決まっている。しかし、海中から突き出た鉄パイプ製の櫓に設置されているバーナーが、安定したオレンジ色の焔を燃やすあいだは、彼女たちの青い衣服も血を連想させる葡萄色にしか見えなかった。
女たちはさっきから海上の火をみつめていた。だがつい今しがた、バーナーの巨大な焔が急に暗赤色に変わり、爆発でもしたかのように黒煙を噴きあげたとき、長い髪を風になびかせた若い方の女が、声にならない悲鳴をあげた。

女の悲鳴は、ほんとうに声にならなかった。それとも、本当は鋭い金切声が埠頭の赤い空気を震動させたのに、彼女の耳が麻痺していて聞こえなかっただけなのか。

そのとき若い女はふと、世紀末の画家エドゥアルド・ムンクの名画『叫び』の絵柄を思いだした。あの絵の中で叫んでいた人物と、自分自身の姿が重なりあった。

おそらく、自分でも信じられないほどの悲鳴をあげたに違いないのに、その声は咽喉を抜けるよりも早く赤いフィルターに吸収されてしまった。真赤な血の色に染まった風景の中では、音は全部吸収されてしまうのだ。まるで、赤色の光線しか届かない深い海底でのことのように……。

埠頭の一、二キロ先に立つ海上バーナーは、たしかに海底油田の採油タワーか海底火山の噴火口のように見えた。海底の火を海上へ噴きあげるパイプ——そう考えてもいい。しかしこのバーナーは、実際には地上から供給されるガスを燃料にしていた。ただ、櫓の中央を貫いて東京湾の海底深く打ち込まれたシャフトには、高性能の地震計が組み込んであった。だから湾の付近で海底地震が発生すれば、それをいち早くキャッチして、バーナーの焔を暗赤色に変えるのだ。

若い女は、あまりにも長いこと埠頭に立っていたせいで、突然バーナーの色が暗くなったとき、自分でも震動を感じたのだった。焔の色の暗示にかかったのか、それとも脚が痺れただけなのか。しかしとにかく彼女は地面の揺れを感じ、悲鳴をあげた。

若い女のそばにいたもう一人の女が、振り返って微笑した。

「どうしたの？　海上バーナーの色が変わっただけよ」

齢とった、火のように赤い髪をもつ女だった。皺をきざんだその顔に、いくつもの黒い影がよぎった。

若い女は、浜風に吹き乱された髪を掻いこみながら、切れ長の眼を見ひらいた。

「ええ……」と、困ったようなつぶやき。

老女はうなずき、ふたたび視線を海上バーナーの方向へ戻した。きちんと結った髪が、ハッとするほど赤く照り映えた。艶やかな白髪でないと、とてもこれだけ美しくは赤い灯影に染まらないものだ。

しばらく沈黙が流れた。

若い女は思いあまったかのように顔をあげ、口を開こうとした。だが、埠頭の右側を一瞬さまよった眼に映った光景が、彼女のくちびるを凍りつかせた。

十台ほどの自転車が群れをつくって迫ってきた。黒ずくめの男たちは競輪選手みたいに姿勢を低くし、かすかに海側へ傾きながら、女二人をめざして突進してくる。

まったく音がしないのが不気味だった。しかし高性能の無音モーター付き自転車だったから、スピードはオートバイ並みに出せる。

自転車の隊列が二人に急接近するにつれ、騎り手たちの表情が見えてきた。騎り手はみなくちびるを歪めて嘲い、眼を血走らせていた。

若い女はあわてて後ずさりした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb